

出生（分娩）直後における 母子相互作用と、妊娠、分娩歴

島田信宏（北里大産婦人科）
野村紀子（ ” ” ）

序 論

分娩直後における、母親と、その新生児の取り扱い方については、それぞれの国、文化、慣習などの相違によって異なっている。我国においても、施設分娩と家庭分娩とのちがいが、あるいは、同じ施設分娩であっても、母児同室制、母児異室制などの、それぞれの新生児養護方法によつての多少の違いはある。分娩直後の新生児は、母親のそばに寝かされる場合もあるが、施設分娩が、約95%以上を示める我国では、その新生児の取り扱い方に、あまり差はないと考える。すなわち、分娩後の新生児は、沐浴を終え、母親との、1分～2分間の面会をすまして、新生児室に収容される。母児同室別の方法によつて、新生児を養護している施設でも、分娩直後であれば、母体側を重視し、あるいは、出生直後の新生児の生理的観察に重点をおいて、こうした方法をとる場合が多い。その後は、少くとも、母親自身が歩行をはじめる、8時間前後、なかには、24時間前後も、母児の接触を持たないのが現状である。しかし、CONDOAや、SANDERらの研究によると、「新生児は、生後数分間から数時間で、すでに物をみたり、音を聴いたりしている。また、母親の声に反応して、リズムカルに動く。」としている。しかしながら、現状の多くの分娩施設では、その点を重視し、こうした新生児を中心として、母親との接触を進めている施設は、皆無であるとしても過言ではない。このことは、我々がすでに、母親には母性本能が存在し、自分の子供に対して、愛情を持っているのは、あるいは、愛情を持つことは当然である。と信じている。また、子供の方でも、一緒にいる母親を、その成長、発育のなかで見分けていくものである。したがって、その子供の一生のなかで、出生直後から、入院中の、わずか7日前後では、母児の間には、特別に、あるいはたいして影響はないのではないか。と判断してしまっているのか

も知れないのである。しかし、母と児のきずな、母親の児に対する愛着についての研究が、アメリカなどで明確にされるにつれ、分娩直後の母親の、児に対する行動から、重視していかななくてはならないと考える。

当院では、年間、約1500件の分娩があり、開設より現在まで、約20000件の分娩を取り扱っている。分娩直後は、母児に問題がない限り、原則として、分娩室内で、母児の最初の対面を行っている。すなわち、分娩第Ⅳ期をむかえている母親に、沐浴を終えた新生児が、助産婦によつて抱き上げられ、母親の顔の近くで、対面する。こうした場面では、母親が自から手を差し出して、我児にふれようとする母親、あるいは、助産婦との対話だけで、我児にはふれない母親とがいる。児にふれる母親の多くは、その児に語りかけることが多く。ふれない母親の多くは、そばにいる助産婦に質問する、「手や足はありますか」「男の児ですか」「女の児ですか」などである。こうした行動の相違は、母親自身の偶然的行為なのか、あるいはまた、それぞれの行動をとる母親群には共通点があるか、などについて、調査を進める。

本 論

当院における分娩管理は、すべて内測法により、分娩時には、各種の麻酔を使用している。麻酔の種類は、バランス麻酔、硬膜外麻酔、陰部神経ブロックなどであり、麻酔の方法や、麻酔薬の量は、産婦の条件や、入院時の分娩進行に合せて決定する。こうした分娩管理を行うことによつて、合併症を有する産婦の分娩管理が十分に行なわれ、分娩中の胎児モニタリングが、周産期死亡の減少につながっている。しかし、一方では、こうした分娩管理について、自然の摂理にはずれるとか、器械が分娩をさせるなどの、全く誤った解釈をしている人もいる。また、こうした方法では、母親の

子供に対する愛情が薄くなるのではないが、…と危惧する人もいる。しかし、それらは、すべて実証されたものではなく、感覚的にとらえているにすぎない。周産期医学は、日々進歩し、周産期死亡の減少や、母体死亡の減少をみても、こうした近代分娩管理が、十分にその役割をはたしている点について、認めざるを得ない。

人間以外の動物では、分娩中に、無意識状態を経験すると、明らかに自分の子供を拒絶すると言われている。しかし、人間においては、こうした現象はみられないという。そのことは、当院においても、そうした現象が認められないことから、納得しうる。当院での産婦の状態では、逆に、感情の抑制がないことから、周囲の人々の眼を気にすることなく、素直に自分の感情を表現していると思われる場面を多くみることができる。現在では、分娩様式や麻酔使用の有無、あるいは、会陰切開術などの、産科的手技が、母児間にどのような程度で影響を与えているか。という点について明確にされていない。

母親としての自覚や姿勢、あるいは子供に対する愛着の程度は、その母親のおかれている、社会的、経済的、心理的因子に左右される面が多い。具体的には、母親になることを、その産婦自身も望み、かつ、夫やその家族にも期待されているか、あるいは、その母親自身が、子供の誕生を望んでも、夫が望んでいない場合もある。分娩という現象は同じであっても、それぞれの産婦をとりまく背景は、決して同様ではない。こうした点から、分娩直後の母児対面の場面で、母親の行動に違いが生じるのではないかと考える。こうした因子は如何なるものであるのか。また、産褥期における乳汁分泌は、生理的現象ではあるが、母親の精神的影響も受けやすい。こうした乳汁分泌の状態と、その新生児の体重減少率との関係などについて明確にする。

すなわち、最初の母児対面での母親の行動を中心として、

- (1) 分娩様式、麻酔を使用していることとの相互関係。
- (2) 母親をとりまく因子の分類。
- (3) 乳汁分泌量と、児の育児状態との相互関係。などについて、調査表を使用し、調査する。

A. 方法

- (1) 調査表における、1. 不変的因子、1), 2), 3), 4), 5), については、入院時の助産録の記載時に、質問形式によって、チェックする。
- (2) 3. 面会時の母親の行動については、分娩直後の母児対面を行った助産婦が、母親の行動を観察し、調査表に記入する。2. 変化しうる因子、1), 2), についても同時に記載し、チェックする。
- (3) 母児退院後、新生児の記録(看護)から、乳汁分泌量、児の体重減少率を記載する。

B. 場所

北里大学病院、産科病棟(3B)、分娩室、新生児室。

C. 調査例

初産婦、500例以上。経産婦、500例以上。

経過、および結語

以上の目的によって、調査を開始した。しかし、臨床場面での調査のため、いまだ、調査例は、50余例である。これは、調査目的を熟知していない者がいたり、対面の方法に、違いが生じたり、記入もれの調査表がでてきたことによる。したがって、再度、この調査をやり直した。今后は、母児対面の場面に出会う、すべての看護スタッフに、その目的を再度、明確化し、正確な調査ができるよう配慮しながら、この研究を進めていきたいと思う。

分娩直後の母子相互作用

(チェック表)

1. 不変的因子

- 1) 最終学歴 (1) 中卒 (2) 高卒 (3) 大卒 (4) 専門高校卒
2) 妊娠・分娩歴 (1) 初産婦 (2) 経産婦 (3) 流産歴
3) 出産に対する態度 (1) 計画出産 (2) 無計画出産
4) 家族、および夫との問題 (1) あり (2) なし
5) 妊娠中に乳房の手当てを行っていたか。 (1) はい (2) いいえ (3) その他

2. 変化する因子

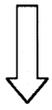
- 1) 麻酔の種類 (1) バランス麻酔 (2) 硬膜外麻酔 (3) 硬膜以外の局所麻酔 (4) その他
2) 分娩様式 (1) NSD (2) VE (3) 鉗子分娩 (4) BEL
(5) C.S (全身麻酔は除く)

3. 面会時の母親の行動

- 1) 出生後の面会時間 時間 分後
2) 母親が手を出して子供にふれようとしたか。 (1) はい (2) いいえ
3) 子供のどこにふれたか。 (1) 手 (2) 足 (3) 頭 (4) 顔 (5) その他
4) 母親の表情

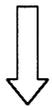
4. その他

- 1) 乳汁分泌量 (1) 第1日目 _____ ml (2) 第2日目 _____ ml
(3) 第3日目 _____ ml (4) 第4日目 _____ ml
2) 児の体重減少率 (1) 第1日目 _____ % (2) 第3日目 _____ %
(3) 退院日 _____ %



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



序論

分娩直後における、母親と、その新生児の取り扱い方については、それぞれの国、文化、慣習などの相違によって異なっている。我国においても、施設分娩と家庭分娩とのちがひ、あるいは、同じ施設分娩であっても、母児同室制、母児異室制などの、それぞれの新生児養護方法によつての多少の違いはある。分娩直後の新生児は、母親のそばに寝かされる場合もあるが、施設分娩が、約 95%以上を示める我国では、その新生児の取り扱い方に、あまり差はないと考える。すなわち、分娩後の新生児は、沐浴を終え、母親との、1分～2分間の面会をすませて、新生児室に収容される。母児同室別の方法によつて、新生児を養護している施設でも、分娩直後であれば、母体側を重視し、あるいは、出生直後の新生児の生理的観察に重点をおいて、こうした方法をとる場合が多い。その後は、少くとも、母親自身が歩行をはじめ、8時間前後、なかには、24時間前後も、母児の接触を持たないのが現状である。しかし、CONDOA や、SANDER らの研究によると、「新生児は、生後数分間から数時間で、すでに物をみたり、音を聴いたりしている。また、母親の声に反応して、リズムカルに動く。」としている。しかしながら、現状の多くの分娩施設では、その点を重視し、こうした新生児を中心として、母親との接触を進めている施設は、皆無であるとしても過言ではない。このことは、我々がすでに、母親には母性本能が存在し、自分の子供に対して、愛情を持っているのは、あるいは、愛情を持つことは当然である。と信じている。また、子供の方でも、緒にいる母親を、その成長、発育のなかで見分けていくものである。したがって、その子供の一生のなかで、出生直後から、入院中の、わずか7日前後では、母児の間には、特別に、あるいはたいして影響はないのではないかと判断してしまっているのかも知れないのである。しかし、母と児のきずな、母親の児に対する愛着についての研究が、アメリカなどで明確にされるにつれ、分娩直後の母親の、児に対する行動から、重視していかななくてはならないと考える。

当院では、年間約 1500 件の分娩があり、開設より現在まで、約 20000 件の分娩を取り扱っている。分娩直後は、母児に問題がない限り、原則として、分娩室内で、母児の最初の対面を行っている。すなわち、分娩第 1 期をむかえている母親に、沐浴を終えた新生児が、助産婦によつて抱き上げられ、母親の顔の近くで、対面する。こうした場面では、母親が自から手を差し

出して、我児にふれようとする母親、あるいは、助産婦との対話だけで、我児にはふれない母親とがいる。児にふれる母親の多くは、その児に語りかけることが多く。ふれない母親の多くは、そばにいる助産婦に質問する、「手や足はありますか」「男の児ですか」、「女の児ですか」などである。こうした行動の相違は、母親自身の偶然の行為なのか、あるいはまた、それぞれの行動をとる母親群には共通点があるか、などについて、調査を進める。